

セクシャルスクール4 ―サンプル―

1

「今日からまたよろしくな」

「お世話になります。頑張ります」

新学期。里実はいレギュラーな二・五年生になった。

場所は二階の空き教室。本来のMクラスの教室は、ネコクラスから進級した四人が使うという。

とはいえ、里実にあてがわれた部屋もこれまでの教室と同じだった。黒板があつて、教卓があつて、里実の机と椅子がある。教室後方には実技用のベッドやロッカーなど。

教壇から須坂が里実に笑いかける。

「復学おめでとう。よく頑張ったな。クラスは俺たち二人だけだし、気楽にやっていこうな」

「はい」

でももっと頑張ると決めた。須坂と一緒にいるために。

「制服はこれまでと同じだ。洗浄も変わらず職員室。テキストも以前渡してあるやつだし、何も変わらないよ」

「わかりました」

きつとそれらは、里実の負担にならないようにという配慮だろう。

「よし、じゃあ授業内容について説明するぞ」

「はい。Mクラスの時に終わってなかった内容ってことでしたよね」

「ああ。でもネコクラスの時の内容を復習したり、Mクラスの履修を終えても時間が余るようならドMクラスの予習をしたりしてもいいし。一応最優先はMクラスの授業内容だけど、なんだかんだ言って里実は休んでる間もちゃんと勉強してたからな。多少の座学はあるが、残ってるのはほとんど実技だ」

「実技……」

「あと進級後のプレイ傾向も決めないと」

「……って、なんでしたっけ」

「三年の排泄」

それだけで思い出せるか？ と尋ねるように須坂の目が細められる。

「あ、ペットプレイとか赤ちゃんとか」

「正解。でも途中でも変えられるから。っていうか臨時教師になるならなんでもできるようになってくかないとな。でもペットプレイは四つん這いが基本だから、ひとまず里実は赤ん坊がいいと思う。似合ってるし」

「あの、僕もう四つん這いも大丈夫です」

強がっているわけではない。須坂が里実に寄り添い、丁寧なケアをしてくれたからだ。

それでも須坂はまだ不安なのか、一瞬目を伏せた。し

かしすぐにふわりと笑う。

「でもせっかくオムツに排泄できるようになってるし」

「う……」

恥ずかしい。けれど須坂は嬉しそうに頬を緩めた。

「オムツへの排泄って、普通はできるようになるのに時間かかるんだぞ。でも里実優秀だった」

褒められると、どういう顔をしたらいいのかわからなくなる。曖昧に笑いながら、ふと気付く。

「でもできるようになってるなら、それ以上することってないですよね？」

哺乳瓶からミルクも飲ませてもらったし、風呂にも入れてもらっていた。

「あー……まあ」

「じゃあ」

他ので。その気持ちを視線に込めると、須坂は少し考えるように視線を下げた。

「それはまあ、考えておくよ。それから――Mクラスでは本当だったらドMクラスの見学もするんだけど。それでどんなプレイをするのか知って、ちょっと体験もさせてもらって、本当にドMクラスに進級するかを検討する」

「本当だったら、ってどういうことですか？」

尋ねると、須坂が笑みを深めた。

「先生？」

「成長したな、と思つて」

「え？」

なんのことを言われているのかわからなかった。

「ネコクラスの頃は、訊きたいことがあつても『誰か質問してくれないかな』って一馬たちの様子を窺つてたろ」

「あ……」

そうだった。でも誰も手を上げなければそのままになり、ぼんこつな頭は疑問さえ記憶に残さなかった。

（そんなところまで見てくれてたんだ……）

須坂は本当に、これまで里実が会ってきた先生たちとは違う。

「嬉しいよ。話してもらえて」

「先生が、いっぱい話しかけてくれたからです」

「これからもたくさんいろんなことを話そうな」

「はい」

須坂が満足げに頷いた。

「で、さっきの話だけど」

なんだったつけ、という疑問が顔に出ていたらしい。

「本当だったらドMクラスの見学をするって話な。でも今期はドMクラスがないだろ」

「……あ」

そうか。本当だったら里実がドMクラスの学年なのだ。けれどネコクラスからMクラスに進んだのは里実

一人で、しかも進級できなかったので誰もいないことになる。

「一応編入生の予定はあるんだけど、まあ今期は臨時教師が大活躍だな。ドMクラスの代わりを臨時教師が務める」

「臨時教師……！」

里実の目標とする仕事だ。そういうこともするんだな、と改めて思う。

（そっか、だから全部できる人じゃないとダメなんだ……）

頑張ろうと決めた。

けれど臨時教師になれる自信はない。

「里実」

呼ばれて顔を上げる。

「進路のことは一緒に考えていけばいいから。ドMクラスの内容は、気持ちだけではどうにもならない」

「それくらいすごいってことですか」

「まあ……けど、ドMって一言で言っても単にSMとしてのMだけじゃないんだ。実際にはいわゆる特殊プレイ全般を簡単にドMって括ってるだけで」

「特殊プレイ……？」

聞いたことがない言葉だった。どんなものかわからない。

「たとえば拷問系とか、エイジプレイとか。あとは奉仕

系、人体改造系かな。でも一人で必ず全部やるわけじゃなくて、どれをやるかは人によるんだ。だから生徒の趣味が分かれた場合、DMクラスの担任は複数になることが多い」

聞いても、ぼかんとするだけだった。エイジプレイだけはなんとなく想像できたけれど、他はわからない。

顔に表れていたようで、須坂が笑った。

「エイジプレイとペットプレイは一人で教えられるけど、拷問系や人体改造系はプレイに人手がいるんだよ」
「そうなんですか」

「危険も伴うし。内容次第では養護教諭が不在の日はできないとか、教室内に待機してるとか」

「え、そんなにですか」

「ああ。だから人体改造系に関しては臨時教師用の枠があるんだ。でも今そっちの臨時教師はいるから、里実が学ぶ必要はない」

「……えっと」

「サブインジョンって聞いたことあるか」

「サブ……？」

「サブインジョン。男性器切開。ちんちんを切ったりするんだけど、そういうのって一度やったら戻せないだろ？ それに普通の人がやるにはハードルが高すぎる。だから元々そっちの趣味の人が臨時教師になるんだ」

「……おちんちんを切るんですか」

信じられなかった。痛いだろう。いや、痛いどころでは済まないし、排泄はいいだろうとするのだろうか。

「そういう趣味の人がいるんだ。自分からやりたいっていう。でもその臨時教師は今いるから、里実がする必要はないってこと」

「……はい」

よかった。

「でも奉仕とエイジプレイと拷問系はできるようにならないとな」

「……えっと……」

「大丈夫。授業でちゃんと説明するから」

本当に大丈夫だろうか。臨時教師になるにはドMクラスを卒業しないといけないとわかってはいても、少しだけ怖くなった。

頑張らないと、と思うけれど、気持ちだけではどうにもならないとさっき言われたばかりだった。

そんなことを考えていると、ふと疑問が浮かんた。

「……あれ？ 赤ちゃんプレイとかをするならえっちゃんを学んじやいけないって話じゃなかったでしたっけ」

それなのにエイジプレイの勉強があるというのはどういうことなのだろう。

「ああ、悪い。そこまでは説明してなかったか」

須坂が教師用の椅子を持ってきて里実の机の横に腰

掛けた。

「エイジプレイでも本当に赤ん坊扱いするっていうのと、あくまでただのプレイっていうのがあるんだよ。本当の赤ん坊扱いなら早い段階で卒業することが多いかな。もちろん、赤ん坊としての過ごし方を学んでからになるけど。で、もう一つはえっちな赤ん坊だ。オムツあててよだれかけつけた状態で男を誘っちゃやうようなえっちな子な。そういう子はしっかり学ぶ」

そういうことか。ようやく理解できた。

「――とはいえ、エイジプレイって別に赤ん坊が対象なだけじゃないから。実年齢とは違う扱いをするってのがエイジプレイ。幅広く言えばな。だから幼児が好きとか少年が好きとか、そういうのもある」

「たくさんあるんですね」

「育てるのが好きって人もいるよ。赤ん坊設定から始めて、少しずつ育てていく」

「須坂先生も……？」

「好きだよ。オナニー教えるのとか」

「……えっちです」

「エロいことが好きじゃなかったらこの学校の教師になってないだろ」

(……たしかに)

「言っておくけど、臨時教師になるなら里実もえっちなことが大好きにならないとだめだぞ」

「あ……」

もう好きだ。けれどそれを言葉にするのは恥ずかしい。

「はい、その、頑張ります……」

「うん、一緒にな。まだまだ学ぶことはたくさんあるし」

「はい」

それにしても、須坂はすごい。違うクラスの内容まで把握している。

「あの、臨時教師になったら全部のクラスの授業内容を覚えないとダメでしょうか」

「ん？ そんなことないよ」

「臨時じゃない、ちゃんとした先生が全部覚えてるからってことですか」

「他のクラスのカリキュラムってことか？ 覚えてないよ」

「でも先生、ドMクラスのこと詳しいですよ」

「ああ……俺はずっとドMクラスの担任やってたから」

「え——そうなんですか」

「まあな。それより、里実も淫乱なMになれよ」

「淫乱なM……」

「ムラムラしたら俺に乗り上がって腰振ってちんちんこすりつけてくるとか」

「えっ」

「すごい興奮する」

「……それ、先生の趣味じゃ……？」

「悪いか」

「いえ！ わ、悪くないです……！」

須坂はそういう子が好き、と三回心の中で唱える。でも後で『そういう子ってどういう子だっけ？』となりそうなのがした。

机からノートと鉛筆を取り出す。

「里実？」

「あの、今の……」

さすがに須坂の好みだけをメモしたら笑われそうな気がしたので、『エイジプレイは赤ちゃんだけじゃない』と書く。

「えらいえらい」

「へへ……」

ちょっと罪悪感。でも須坂の好みは絶対に忘れたくない。

エイジプレイの下に、『ムラムラしたらこすりつける（すさか先生が好き）』と書いておく。

それを見た須坂が嬉しそうに笑んだ。

「従順だな」

「わ、忘れたくなかったので……」

「じゃあ、せっかくだからそのまま書いて」

「何をですか」

「これからやってく実習の内容。忘れちゃったら、いざ

やるぞって時に驚いちゃうだろ」

「すみません……」

ぺこりと頭を下げて鉛筆を握り直す。

「まずは二年の時にやるって言ってあったやつ」

「……なんでしたっけ」

進級した初日に、今のように授業内容は説明されていた。けれども忘れてしまっていた。いったいどこまでやって、何が残っていたんだっただか。

「ローター責め」

「……ローター責め」

繰り返すと須坂が笑った。

「初耳みたいな反応するなよ」

「え、えっと」

すっかり忘れていたので初耳の気分です、とは言えない。

逃げるように下を向き、ノートに書く。

「ちなみに三十分耐久な」

「さんじゅつぶん……たいきゆう……」

数字とローター以外はひらがなだけれど、ちゃんと書けた。

そのことにほっとした後で、「三十分」と目を疑った。

「里実、気持ちいいの好きだろ」

「……嫌いではないですけど」

好きだと素直に言う勇氣はまだない。

「さすがに最初から三十分はしんどいから、もっと短い時間からやるよ。それでもじゅうぶんきついけど」

耐えられるだろうか。

「それから騎乗位とフェラチオの練習ももう少ししような。あと乳首も育てたい」

「きじょうい、ふえらちお……」

「おい、それじゃヘラチオだぞ。フェ、な」

「ふえ……ら、ちお……」

須坂は里実が書けるまで待っていてくれた。

「それからコミュニケーションの練習」

カタカナの勉強は避けたい、と思いながら鉛筆を動かす。

「こみゅに……けー、しょん……」

しかし書き終えても何も言われなかったので、顔を上げた。

「先生？」

「あとは、カタカナの勉強だな」

須坂の長い指がノートをトントンと叩く。

「これじゃ『コミュニケーション』だぞ。しかも間違えないからってひらがなで書いたら」

バレていた。

「すみません……読むことはできるんですけど」

「怒ってないよ。かわいいって思ってるだけ」

「字、書けないと臨時教師になれないですよね……」

Mとか、セックスとか、そういう以前の問題だった。

「そんなことないよ。まあまったく何も書かないってわけにはいかないと思うけど、臨時教師って言ったらって相手役するのがメインだから。担当教師は別にいる」

「そうなんですか」

「ああ。たとえば里実の相手をさせるのにタチの臨時教師を呼んだとするだろ。でも俺がその教師と里実に指示をするし、授業計画や報告書も俺が書くから。あくまで手が足りない時のお手伝い。主体的に動くわけじゃない。だからかなり極端な言い方をすれば、担当教師が言ったことをやればいいだけ」

「そうなんですね」

よかった。

「でも、だからって書けないままでもいいわけじゃないからな。それにパソコンも使えた方がいい」

「触ったことないです」

「小学校や中学校でやらなかったか。俺の時代でもあったぞ、パソコンの授業」

「授業はあったんですけど、僕が触ると壊しそうだから何もするなって言われて……」

あの時は、それも仕方ないと思っていた。思うようにしていた。でも今は人の温かみを知って、悲しかったな、と思えるようになった。

「悪い。嫌なこと思い出させたな」

伸びてきた腕に抱きしめられ、目を閉じる。

（大丈夫、もう過去……）

終わったことだ。その証拠に、今はこうして触れてくれる人がいる。それを確かめるように須坂のシャツを握ると、頭を撫でられた。

（好き……）

体から力を抜き、筋肉質な胸に顔を預ける。目を閉じると、頭を撫でる須坂の手の温かさを感じた。心地いい。安心できる。

でも、もう学校だ。甘えてばかりはいられない。

須坂の胸を押すようにして体を離す。

「大丈夫です。ありがとうございます」

「俺の部屋にパソコンあるから、今度教えるよ」

「でもそれは先生のですよね」

「だからいいんだろ。職員室のはさすがにいろいろ情報が入ってるからまずいけど」

「先生の、僕が触ってもいいんですか」

「いいよ。エロ動画でも観るか」

「え」

「まずは動画の再生方法から覚えようか。里実はタブレットでエロ漫画を読めるようになったしな」

「え、や、えっと」

しかし、臨時教師になった時にどういことができ

ればいいのか、そもそもパソコンでは何ができるのかもよくわかっていなかった。

「……頑張って覚えます」

「うん。慣れたら動画編集しよう」

「動画編集？」

「里実のオナニーを撮って、射精シーンだけつなぎ合わせて総集編を作るとか」

「えっ……」

「かわいいから心配すんな」

こういう場合、心配という言葉は当てはまるのだろうか、と疑問に思いながら頷く。

そんな里実を、口をへの字にした須坂が見下ろした。

「里実はあるだな、嫌なことは嫌って言えるようになるかな」

「や、そんな……」

そもそも、須坂に関することでされて嫌だと思うことがない。ただ恥ずかしかったり、どう反応したらいいかわからなくて戸惑ってしまったりするだけだ。

「それもコミュニケーションの練習。な？」

「……はい」

「でもクラスメイトがいるわけじゃないから限度があるし、まあこれはちよつと考えがあるから」

「わかりました。ちゃんと頑張ります」

「里実頑張るすぎなぐらいだから、たまには肩の力

を抜いてな。とりあえず説明はこんなもんな。でも進捗次第で臨機応変に変えていくから、しんどいとか怖いとか、そういうのは我慢せず言ってな」

「はい」

「じゃあ……別に自己紹介することもないし、今日はこれで終わりにするか」

「……え？」

まだ登校してから三十分ほどしか経っていない。ぼかんとした里実を見て須坂が笑った。

「なんだ、自己紹介したかったのか。していいぞ」

「えっ、え」

「ほら」

急かされ、わけがわからないまま立ち上がる。けれどすぐ「座ったままでいいぞ」と言われて腰を戻した。

「え、と……里実、です」

「うん」

「……里実です……」

他に何を言ったらいいのかまったくわからなかった。須坂が笑う。

「知ってる。唾液の味も体温もちんちんの小ささや色も、アナルの具合も知ってる。乳頭の敏感さも」

「っ……」

「ほら、自己紹介もコミュニケーションの一つだよ」

「すみません、何を言ったらいいのか……」

自分のことを話そうと思っても、勉強ができないことや、運動神経がないことくらいしか思いつかない。

「じゃあ、好きな食べ物は何？」

「あ……おうどん、です」

「うん、おうどん。何うどんが好きなんだ？」

「え……種類、ですか」

「そう。肉とか天ぷらとかカレーとか」

「甘いお揚げの……」

「甘いきつねな」

「あつ」

「ん？」

「あと、大学芋……」

「大学芋？　へえ、そうなのか」

「甘い、おいしいです」

「じゃあ高野豆腐も好きか」

「高野豆腐……って甘いですか」

「甘いだろ」

「……はい」

「いや、違うと思うなら違うって言っていいいんだぞ」

須坂に笑われ、顔が熱を持った。

「……すみません」

「謝るなって。必要ないんだから。他に、里実が思う甘い食べ物ってなんだ？」

「かぼちゃのいところ煮、とか」

「なんだそれ」

「かぼちゃとあずきを煮たやつです」

「そんなのあんのか」

「ご近所のおばあちゃんが作ってくれて」

「ふうん……。じゃあ好きな動物は？」

「動物……」

動物に好き嫌いを考えたことがなかった。

「犬……とかですか」

「俺が訊いてただけだな」

また笑われてしまった。

「せ、先生は？ 先生はどんな動物が好きですか」

「どんくさいハムスターかな」

「……へえ」

イメージと違った。ライオンとかゴリラとか、強いも

のが好きそうなイメージだった。

「なんだ、怒らないのか」

「え？」

「……いや。じゃあ休みの日の過ごし方は？」

「勉強……です」

「えらいな。趣味は？」

「……何も」

「ないのか。じゃあこれをしてる時間が一番幸せってのは？」

「……須坂先生の抱っこ……」

本人を前にして言うのは恥ずかしいけれど、事実だった。須坂の腕の中にいる時が一番安心できて、生きてよかったと思える。

これまでに見たどの笑顔よりも嬉しそうな顔で、須坂が里実の手を握った。

「じゃあもう、俺にしか里実を幸せにできないな」

「……はい」

顔が熱い。

「俺も里実を抱っこしてる時が一番幸せだよ」

「先生……」

嬉しい。へへ、と笑うと須坂も笑む。

「よし、じゃあ自己紹介は終わり。今日はこれで——って言っても、さすがにまだ早いな。ちょっと乳首いじるか」

「はい！」

「ん、それじゃこれ。制服」

教師用の机から取り出された紙袋。札を言って、中身を取り出す。

「……久しぶりです」

「ああ。ちよつと抵抗あるか？　でもすぐ慣れるだろ」
「う……」

部屋着を脱ぎ、胸全体と、亀頭だけを隠す淫らな制服を身に着ける。

「ちゃんとちんちんの皮むいたままになってるか？」

「は、はい――」

須坂が里実の正面にしゃがんだ。至近距離からペニスを見られる。

「――うん、よし。じゃあベッドに移動しようか」

教室後方のベッドに座ると、背後から須坂に抱きしめられた。

「空いた時間とか、部屋でもたまに自分で乳首をいじるようにしてな」

「わかりました」

「すぐに乳頭には触らず、まずは乳輪から。せっかく着たけど、脱がせるぞ」

須坂が紐をほどき、胸を隠す制服を外す。

「乳頭、起ってる」

「っ……だって……」

今から須坂といやらしいことをする。そう思ったなら勝手に体が反応してしまった。

「うん、かわいいよ。もつとえっちになろうな」

里実の背後に座った須坂の指が、胸の淡い色の部分をくるくると撫でる。

「あ……」

「気持ちいいか」

「はい……でも」

「物足りないだろ。それでいいんだ。そうやって焦らしてゆつくりと高める」

「んっ、はいっ……」

「やってるうちにどんどん敏感になっていくから。でも強くはしちゃだめだぞ」

「あっ……ん、はいっ」

じれったい。もっと気持ちよくなりたい。早く中心部を触ってほしい。

「ほら、じゃあやってみ」

言いながら、須坂が里実の正面に移動した。

「え——」

「乳輪だけな」

「……はい」

須坂にしてほしかった。けれど自分でもできるようにならないといけない。

須坂がしたように、人差し指で乳首の平らな部分をくるくると撫でる。

「ん……」

自分でしても、あまり気持ちよくはなかった。須坂にしてほしい。でも甘えていてはいけない。

「っは……ん……」

「そのうち乳首、もっと敏感になるから」

「はいっ……」

むずむずがきつい。ペニスへの刺激が欲しくてたま

らず、腰が揺れ始める。

「あつ、せんせつ、せんせえつ」

「色っぽいよ」

「あ……や……」

でも手は止まらなかった。もっと気持ちよくなりた
い。直接的な刺激が欲しい。

「吸引してみるか」

「え？」

須坂がベッドを下りた。なんとなく手を止め、里実も
そちらを見る。須坂が壁際の柵から何かを取り出して
いた。しかし里実からは見えなかった。

「なんですか」

「吸引器」

「吸引器……」

須坂が手にしていたのは、小指より細い透明の筒
だった。その先端に白いつまみのようなものが付いて
いる。

「ほら、乳首貸してみ」

須坂の方に向き直って体をそらせる。

「ん、いいこ」

須坂が里実の乳首にローションを塗った。

「アッ」

「敏感だな」

「ん……」

ローションのぬるぬるは気持ちいい。普通に触られるのとはまったく違う快感を受ける。

「もっといいじってやりたいけど、今はこっちな」

須坂が筒を里実の右の乳首に被せ、つまみを回した。

「あ……」

「うん、膨らんできた」

「あ、せんせ……」

筒が小さいので、膨らんだのは乳頭だけだった。それが卑猥で、腰の辺りがぞわぞわしてしまう。

「これからは、右だけいじるようにしようか」

「え……?」

「そしたら、どれくらい右乳首が大きくなったかわかるだろ」

「あ……」

左右の乳首の大きさが変えられる。しかも須坂の手によって。

「誰が見ても右だけいじりましたってバレバレの乳首になる。かわいいな」

「っ……せんせえ……」

吸引されている右の乳首がじんじんしてきた。いいじってほしい。このままではつらい。

「毎日しような。これ一つ渡しておくから、部屋でもやれよ」

「はいっ……!」

「じゅうぶん育ったらピアス、な。小さいままの左乳首に開けるのもかわいいけど」

「あ……んっ」

「ま、どっちに開けるかは考えとくよ。里実の乳首は小さいから、左だと排除されちゃうかもしれないし」

「はいじょ……？」

「体がピアスを異物として外に出そうとするんだよ。それを排除っていうんだ」

「へえ……」

「里実の乳頭は小さいから、どうしても穴の位置が外側に近くなるだろ。そうすると排除されやすくなる」

「そうなんですな」

須坂が吸引器を外した。

「あ……」

「まだ膨らんでる。かわいい。頑張って大きくしような」

「アッ」

須坂が、ぼってりした右の乳頭を指ではじいた。もっとしてほしくて、つい須坂に手を伸ばしてしまう。

「せんせい……」

「乳首、いじってほしい？」

「んっ……」

「ちゃんとやってみ」

「あ……須坂、せんせい……僕の右乳首、いじって育ててくださいっ」

恥ずかしすぎた。けれど早く気持ちよくなりたい。須坂に気持ちよくしてほしい。

「じゃあ、ほら」

須坂が人差し指を立て、里実に向けた。

「ここにいじってほしいところを自分であててごらん」

「あ……そんな……」

須坂の指に、乳首を押し付ける。たったそれだけのことが、とても卑猥な行動に思えた。

けれど恥ずかしさよりも、刺激が欲しいという気持ち
が勝った。

膝について腰を浮かせ、高さを合わせて右乳首を須坂の人差し指の腹に押し付ける。

「んっ……」

「上手にできたな」

ご褒美だ、と言って須坂は敏感な乳頭をこねくりまわした。

「ああっ、あっ、あっ、せんせっ」

「右の乳首しかいじってないのに、ちんちんの制服びしょびしょになってるぞ」

「アッ、だってっ、だってえっ」

イきたい。それなのに須坂は右乳首しかいじつてくれなかった。

「――よし、じゃあそろそろ終わりにしとくか」

「え……」

嬉しくない。イきたかった。

それなのに、須坂は里実の乳首を見て笑った。

「ビンビンだな。エロい」

「せんせ……」

「ほら、貞操帯つけるから。ちょっと痛いことするぞ」

「え——」

須坂が里実の陰囊をすくうようにして左手にのせた。

「あっ！」

そこを、右手でパンと叩かれた。強くはない。けれど

下腹部に響くような痛みがあった。

「ううっ！」

「痛いな」

「痛いっ、やあっ」

しかし須坂はペニスが完全に萎えてしまうまで、里

実の陰囊を手でサンドするようにして叩いた。

「ああ……痛い……」

下腹部がずんずんしている。

「ドMクラスになったら手じゃなくて器具で叩くぞ」

「え……」

「しかも自分で足を開いて、『叩いてください』ってお願いするんだ」

「そんな……」

今より痛いのを、自分から頼まないといけないのか。

「だから、今のうちから痛いのを気持ちいいって思えるようになっていこうな」

「……なれますか」

そうなる気がしなかった。

「里実の体はえっちだから、なれるよ。大丈夫だ」

「先生が——」

「もちろん。俺が里実の体をもっともってえっちにしていこうよ」

須坂は話しながら手早く貞操帯を装着した。

下腹部を見下ろす。須坂がつけてくれたのは、Mクラスの時と同じく透明なプラスチックがベニス全体を覆うもので、亀頭の部分だけが濃いピンク色に塗られていた。

（えっち、だ……）

一番敏感な先端部分を須坂に隠され、守られているような気分になる。それなのに、竿の部分は丸見えで——。

「ちんちん、痛くないか？」

「はい……」

「似合ってる。かわいいよ」

「先生……」

「そうだ、これからは寝る前に俺の部屋な」

「え？」

「オムツ。つけとかないとおねしよしちゃうだろ」

「あ……」

あまり喜べなかった。須坂の部屋に行ったら、自室に戻りたくなってしまう。

「悪いけど、朝は自分で脱いで捨ててな」

「……はい」

「ほんととは一緒に寝て、夜中でも濡れたら替えてやりたいけど。でも卒業したらずっと一緒にいられるから」

「先生……」

でもそれは、里実が本当に臨時教師になれば、の話でしかない。

「頑張って卒業しような」

正直、あまり自信はなかった。どんなに頑張っても、頑張るだけではうまくいかない。

須坂が、正面から真剣な瞳で里実を見つめた。

「覚えてるか。一年の修了式で俺が里実と言ったこと」
必死に記憶を手繰り寄せる。

「えっと……先生のに」

「ああ」須坂が頷く。「俺のになってほしいって言った」
「びっくりして信じられなかったですけど、嬉しかったです」

「過去形かよ。今も思ってる」

「あ……」

嬉しい。

それに恥ずかしくて、逃げるように話題を変える。

「あーそういえばあの時、何か言いかけてましたよね。藤田先生が来た時」

須坂は少し、思い出すようなそぶりを見せた。

「あれは…進路の話だ」

「進路、ですか」

「でももういいんだ」

「えー」

「もう里実の希望は聞けたから。俺から臨時教師になつてほしいって言おうと思つてたけど」

「そうだったんですか」

「実はその後も何度か言おうとは思つただけだな」

でも里実がセックスが怖くなつてしまったから言えなかつた、ということだろう。

「すみません」

「いいって。同じ気持ちつてわかつたし。俺から言うんじゃないくて、里実が自発的に思つてくれてよかつた」

「…はい」

照れくさい。

「でもさ」

「はい？」

「無理する必要はないんだ」

「あ…」

予防線だ、と思つた。里実には臨時教師にはなれない。知識も学力も経験も足りず、素質もない。でもそうとは

言いづらいから、無理だとなったときに里実が落ち込まないように今言ってくれているのだ。

「でも大丈夫だから。心配すんな。里実はちゃんと臨時教師になれるよ」

(なれる……)

ネコクラスとMクラスでいろんなことが起こった。そのせいで気を遣って、就職させてあげましょう、みたいな話でもあるのだろうか。それだけは絶対に嫌だった。

「里実」

頭をくしゃくしゃに撫でられ、ぐわんぐわんと脳が動く。

「せんせっ」

「いいから。里実は目の前の授業にだけ集中しとけ」

「……はい」

「勉強するのは生徒の役目。生徒を育てるのは教師の役目。な？　もし生徒が伸びなかったら、それは教師が悪いだ」

それなら、自信がないというのは須坂に失礼だろう。やっぱりちゃんと頑張りたい。たとえダメだったとしても、その時に悔いはないと思いたい。

「がんばります」

「うん。一緒に、な」

2

二・五年生になって、一か月が経った。

須坂が里実の貞操帯を外す。

「洗淨、大丈夫だったか」

毎朝の確認。

「はい。花丸をもらいました」

「校長か」

「はい。でも隣で見てた教頭先生とか事務員さんも、空いてるところに花丸を描いてくれました」

「よかったな」

須坂も養護教諭も、校長たちも調理員たちも、そして普段里実がかかわることのない先生たちも、見守ってくれている気配があった。

その守られているという気配のおかげか、新学期を迎えて一か月が経っても学校や授業が怖いとか、怖いことを思い出してしまうとか、そんなことは一切なかった。そんなふうだったからかおねしよも自然となくなり、オムツも使わなくて済むようになった。須坂は寂しがったけれど、手間をかけさせてしまう申し訳なさもあったので、よかった。

「あとあの、乳首、育ってきたねって」

「ああ、見てもらったのか」

須坂が、里実の胸を隠す制服をまくった。

「あっ……」

「うん、右だけちゃんと大きくなってきてる。毎日吸引頑張ってるもんな」

「はい……」

実際には吸引だけではない。須坂に毎日舐めたり吸ったり舌で弾いたり、指でこねてもらったりしてるし、この一か月の宿題の半分は誰かに乳首をいじってもらったことだった。

だから今、里実の右の乳頭は左に比べて一回り以上大きくなっていた。

「かわいい。それに硬くなった。もっといやらしい乳頭にしような」

誰かに乳首を見られる度に恥ずかしくてたまらなくなるけれど、須坂が決めたことで、しかも須坂がたくさんいじってくれたからこうなったのだ、と思うと嬉しくて、少し誇らしくもあった。

「よし。じゃあ、今日はローター責めをするぞ」

「ローター責め……三十分ですよ」

「それはまだ。まずは十分から刺激に慣らす」

「頑張ります」

「ああ。ただ、拘束するけど大丈夫か」

心配そうな顔で、須坂が里実の表情を窺ってくる。でも大丈夫だと、須坂にちゃんと伝えたかった。

「仰向けになればいいですか」

教室後方のベッド。この一か月間、毎日乳首をいじってもらった場所。ぎゅっとしてもらった回数だって数えきれない。

「本番はうつ伏せなんだ。穴が開いたベッドでうつ伏せになってちんちんだけ下に出して、いろんな液体を出す」

(……いろんな液体……)

「でもこのベッドに穴はないから仰向けな。それに俺もちゃんと隣にいるし」

「あの、じゃあちゃんと穴が開いてるところでしてほしいです。それとも授業で使ってますか？」

「いや空いてるはずだけど、今日は最初だからここでやる」

「大丈夫です。お願いします」

「だめだ。それは三十分の時な。今日はほんと、お試しみたいなもんだから。もしそれでやっぱ怖いってなったら三十分やる時も仰向けでやる」

これは絶対だ、と須坂の目が言っていた。

「……わかりました。よろしくお願いします」

また無理を言って須坂に迷惑をかけるようなことがあつてはならない。大丈夫だと言い張って、須坂に怪我をさせてしまった記憶がよみがえる。

里実は制服を脱いでペニスを露出させると、ベッドに寝転んだ。

「これはローター」

見せられたピンクの小さなおもちゃ。須坂との産卵の時には慣らすのに使ってもらったので覚えている。

「これを里実の敏感な裏筋に固定する」

須坂が説明しながら、里実のペニスをしごいて起たせて皮をむき、ベルトのようなものでローターを裏筋に取り付けた。

「よし、じゃあ次は手足の拘束だ」

須坂は里実の手足首にベルトを巻くと、そこから繋がったチェーンをベッドの柵につけた。これで里実は大の字になり、身動きは取れなくなった。

「怖かったり、耐えられないと思ったら『おうどん』な」

「……はい」

緊張する。

「里実、こっちを見てごらん」

目が合うと、そつと唇を重ねられた。

「セーフワードを使うのに遠慮はいらない。どのタイミングで里実がそれを使っても、俺は絶対に里実を嫌いになったり幻滅したりしないから。これが進路に影響することもない」

「はい」

「最初は短時間しか無理でも、徐々に延ばしていけばいい。里実の限界も知りたいから、無理な時は俺のためにも教えてな」

「はい」

須坂のため。そういうふうに言ってもらえると使いやすい。

「じゃあ始めるぞ」

須坂が里実の隣であぐらをかいた。

「十分、できるだけ頑張ろうな」

須坂が手の中の小さな機械を操作した。

その瞬間、裏筋が震え始める。

「あっ、あっ」

強烈な振動。

「怖くないか」

「はいっ！ きもちいいっ！」

敏感なところが強制的に、人間にはできないような刺激に震わされる。

「あ、あ、あ、先生、先生っ！」

「ん？」

「イクッ、もうイきますっ！」

「もう？ まだ一分も経ってないぞ」

須坂が里実に機械を見せた。振動の強弱を設定するつまみの上に、九分二十秒と表示されている。

「まだ振動も弱だし。これからだぞ」

「だめ、だめです！ アア——っ！」

精液が飛び出す。絶頂というより、強制的に射精させられたような感覚だった。しかもその間もローターは

振動を続ける。

「ああ、ああ、ああ——！」

「イくのが早いな。それじゃあ十分もたないぞ」

「あっ！ あああ——！」

（出てるっ、出てるのにつ）

刺激から逃げようと腰が揺れる。

けれど拘束されているので体はろくに動かないし、
そもそもローターが裏筋にしっかりと固定されている
ので逃げようがなかった。

「ああっ、あっ、あ」

「つらいな」

須坂が優しく里実の頭を撫でる。

「先生、先生ッ！」

助けてと呼びかける。けれど須坂は赤ん坊を見るよ
うな慈しみに富んだ目で里実を見下ろしていた。

「大丈夫だ。そろそろまた気持ちよくなってくる」

無理だ。苦しい。刺激から逃げたい。

「先生っ」

「なんでも出していいぞ。精液でも潮でもおしっこで
も」

「あっ、あっ、」

止まらない振動。もうこれ以上は無理だと思ってい
たのに、徐々にペニスが硬くなり始めた。

「あっ……！」

「声が変わったな。また気持ちよくなってきたか」

「先生っ」

「二回目だ。もう一回気持ちよくなってごらん」

「先生、先生っ」

あと何分残っているだろう。

「どうした？ セーフワード使うか」

後頭部を枕に押し付けるように首を振る。

「うん、じゃあちんちんつらいけど頑張ろうな」

「はいっ！ ア、ア、ア……！」

もうさっきまでの苦しみはなかった。気持ちいい。

「二回目だから、もう少し強くしようか」

「ひあああ——！」

つまみをひねられ、振動が激しくなった。一気に絶頂に駆け上がる。

「あああああああああ！」

ペニスが震えた。けれど射精の脈動などわからないくらいローターの振動が激しくなっていた。

「二回目の射精で残り七分四十三秒」

「ああああああっ」

短時間における二度の射精でさらに敏感になった裏筋が、ローターに弄ばれる。

「おちんちんっ！ おちんちんがっ！」

「うん、ちんちんがどうした？」

「壊れっ、取れるっ」

「壊れないし、取れないよ」

「無理っ！ やっ！ むり、むりいっ！」

「里実がちんちんで気持ちよくなるの好きだろ？」

好きだ。けれどそれは気持ちいいのが好きなだけで、
こんなに苦しいものではない。

「あーっ！ っ！ せんせっ、せんせええええ！」

「かわいい。無理矢理ちんちんブルブルさせられて連続でイカされて、甘えん坊の顔になってる」

須坂がベニスに手を被せた。けれど触れるか触れないかの距離でもどかしい。

「先生っ」

刺激が強すぎて、快感どころか痛みに変わっていた。
つらくて、しんどくて、涙が落ちる。

「ちんちんつらいな」

「つらいっ、おちんちん助けてっ」

「じゃあもう一回勃起させてごらん。勃起すれば気持ちよくなれる」

「勃起っ……」

「そう。体をもっとエッチにしてちんちんを立たせるんだ」

どうすればいいのだろう。こんなにつらいのに、どうやったら勃起するのだろう。考えてもわからず、パニックになった。

「先生っ！ せんせええっ！」

「耐えられなければ『おうどん』だよ」

「やあっ……」

それは使いたくなかった。

「里実は本当に頑張り屋だな」

笑いながら、須坂が機械のつまみに触れた。

きつと弱めてくれる。そう思っていたのに刺激が強くなつて、頭の中が真っ白になった。

「あああああああ！」

「かわいい。ちんちん好き放題されて泣いちゃったな。起つてないのにちんちんから白いの出てるぞ。わかつてるか？」

「ああああっ！」

鳴咽と呼吸のタイミングが合わず、喉がかはつと鳴る。

「大丈夫か」

須坂が里実の胸をトントンと叩く。それでもローターを止めてはくれない。

「あああああああああ！」

「大丈夫。里実のちんちんはまた起つてくるよ」

不思議なもので、須坂の言うとおりであった。つらくて苦しいのに、もう無理だと心の底から思っているのに、ペニスは頭を持ち上げ始めている。

「あと四分十五秒。あんまり早くイくと残りがつらいから、今度はちょっと我慢を覚えてみような」

もうされるがままになっていることしかできないのに、須坂は難しいことを事もなげに言う。

「せんせ、イクーっ！」

「我慢だよ」

「無理、むりいつ！」

「我慢だ。じゃないとまたちんちんがつかなくなっちゃうぞ」

「やだあっ」

おちんちんがつかいの嫌だ。そう思うのに強制的にイカされそうになる。

「先生っ！　せん、せっ！　せんせ、せんせえええ！」

「頑張れ」

「むりいーっ！　――ああ、ああ、ああ！」

イク。イってしまう。

「里実、我慢だ」

「アッ、イク、イクイク出るううううう！」

腹筋に力が入り、びゅるつと精液が飛んだ。その瞬間、須坂はまたもローターの動きを激しくした。

「ひいひいひいああああ！　おうどんおうどんおうどんっ！」

泣き叫んだ瞬間、刺激が止まった。

ほっとする間もなく、頭を抱き込むように抱きしめられる。

「里実」

「先生っ、先生っ！」

ペニスがじんじんしている。痛い。苦しい。感覚がおかしい。まるでそこだけ、自分の体じゃなくなってしまうみたいだった。

でもそんなことより、途中で音を上げてしまったことがつらかった。

「頑張ったな」

「先生ごめんなさい、僕っ」

「ちゃんとセーフワードを使えてえらなかったな。よく頑張った」

「え……？」

数回の強制的な絶頂と泣きすぎたせいで、頭が回っていないかった。

「今のはセーフワードを使う練習だ」

「練習……せーふわーど……？」

「そう。三十分耐久の時は刺激はほとんど一定だから大丈夫だ」

「あ……」

なんだ、そうだったのか。

ほっとしたら一気に疲れがやってきた。けれど普段なら眠くなるところが、刺激が強すぎたせいか目はギンギンになっていた。

「頑張ったちんちんを褒めたい」

須坂が里実の額にキスをしてからペニスを見た。

「ぐちょぐちょだな。潮も吹いたし、お漏らしもしてた」

「え——」

「気付かなかったか？ 里実が思っている以上に里実のちんちんは頑張ったよ」

「あ……」

須坂が、里実の萎えたペニスを口に含んだ。

「先生っ！」

お漏らしをしている、と須坂自身が言ったのに。

汚いそこを、須坂は丁寧に舐めしゃぶった。

「アアッ……！」

激しい刺激を受け続けた後なので、その感覚は鈍っている。でもぬるぬるした感触と、須坂の口内が熱いことはわかった。

「あ……！」

須坂が尿道口に舌をめり込ませた。

「ああっ」

もう無理だと思っていたはずなのに、ゆっくりとペニスが起ち上がる。

じゅぽつと音を立てて、須坂がペニスを解放した。

「かわいい。ちんちんつらいことされた後なのに、また起ってる」

「先生が——」

「フェラチオ、好きだもんな。里実のちんちんは小さくて舐めやすくていい」

ストレートに恥ずかしいことを言われ、返事を見失う。

「……あの、今のを三十分耐えなきゃいけないんですよね」

「まあな」

耐えられる気がしなかった。だって十分も我慢できなかったのだ。

心が暗くなっていく。

「でも拘束するから楽だよ」

話しながら、須坂が里実の体を拭き始めた。

「え？」

「手が自由だと、取りたくなっちゃうだろ。それを取らないようにって、根性が必要になる。でも拘束してればただ耐えるだけで済む」

「あ……」

そうか、そういう考え方もあるのか。

「里実是一直泣いてぐずって、ちんちんがづらい思いをするのを時間まで耐えていればいいんだ」

でも三十分なんて長いだろう。本当にペニスが壊れてしまうかもしれない。

（……でも、臨時教師になったらそういうのも生徒にやって見せたりするのもかもしれないし……）

須坂が無駄なことをするとは思えなかった。

「……頑張ります」

「うん。ちんちんは可哀想だけど、頑張ろうな。終わったらちゃんときれいに洗ってやるから」

「きれいに……」

「たぶん、自分でも触りたくなくなってると思う。貞操帯に安心できると思うよ」

そこまでひどい状態になるのか。

あまり、想像がつかなかった。

須坂が里実を抱き上げてもう一つのベッドに運んだ。

「とはいえ、三十分耐久はまだ先だから。とりあえずほら、少し眠っていいぞ。疲れただろ」

「でも――」

まだ授業が始まったばかりだ。

「いいから。ほら、じゃないとこの後体力が持たない」

「この後……」

いったい何をするのだろう。でも考えてみれば今日の学校はまだ始まったばかりだ。

「いいから。おやすみ」

「……おやすみなさい」

眠気は感じていなかったはずなのに、須坂に頭を撫でられていると途端に睡魔がやってきた。

そうっと手を動かし、須坂のシャツを握る。

ふっという笑ったような音を聞きながら、里実は夢の中に落ちた。

目が覚めた時、里実の頭は須坂の肩にのっていた。

「せんせい……」

「ああ、起きたか」

頭を撫でてから、額にキスをされる。

「すみません、寝ちゃって……」

まだ体は重く、頭はぼうつとなっていた。

「ん、いいから。よく頑張ったな」

「でも十分、もたなかったです」

「里実のちんちんは仮性包茎で敏感だろ。小さいからローターが当たる範囲も広いし」

かばわれているのか、からかわれているのかわからなくなった。

里実が無言でいたからか、須坂が笑う。

「まだ眠そうだな」

「……いえ、もう起きます……今何時ですか」

「まだ十時だ」

どうやら思ったよりは寝なかったらしい。

「もう一回、してください」

「もう一回？」

「今度は三十分、ですよ？」

確認しようとすると、須坂が笑った。

「さっき、やっぱり朦朧としてたんだな。言っただろ、三十分耐久はまだ先だって」

「え——」

まったく記憶になかった。

「しばらくは五分とか十分とかで慣らして、三十分耐久をやるのはそれからだ」

「そうなんですか」

心構えをするのは今日の体験だけかと思っていた。

「セーフワードも使い慣れないといけないからな」

ということは、また今日みたいにきついのをされるということだろう。

「言い慣れろっていうんじゃないぞ。言っても大丈夫っていう信頼関係を築くんのだ」

「先生のこと、信頼してますけど」

「ありがとな。でもまだ遠慮があるだろ？ セーフワードを一回使うごとに、パートナーとの信頼関係が深まるって考えられるか？」

「セーフワードでやめてって言っちゃってるのと同じなのですか」

「言っちゃってる、んじゃないんだ。セーフワードは相手に自分のことを知ってもらう――里実のことを俺が知るためにあるんだよ」

難しかった。よくわからなくて、どうにか理解しようと頑張ってみてもやっぱりさっぱりわからない。

「里実はこのなふうにされるのが苦手、とか。これ以上はしんどい、とか。俺はもっと里実のことを知りたいよ」

「知りたい……」

「里実だって、どこをどうしたら俺が喜ぶかって、知りたくないか？」

「知りたいです！」

「だろ？ それと同じ。俺は里実を気持ちよくしたい。幸せだなんて思わせたい。でもそのためには里実が苦手なことや、限界を知らなきゃいけない。そのためのセーフワードだ」

「あ……」

ようやく意味を理解できた。胸にストンと落ちる。

「ほら、調理員もそうだろ。栄養はちゃんと考えてくれる。でも人には好き嫌いつてあるだろ？ おいしく食べてほしいから、苦手な食べ物を知りたい。それと同じだ」

「わかりました！」

もつとちゃんと理解できた。そう言うと、須坂は褒めるように里実の頭を撫でた。

「でも頭では理解してても、いざセーフワードを使うとなるとやっぱり遠慮が出るんだよ。だから少しずつ使うことに慣れていこうな」

「はい！」

マンツーマンは申し訳ない。でも須坂が里実に合わせた説明をしてくれるのでありがたかった。

「セーフワードに慣れたら、三十分のローター責めを頑張ろうな。あ、でも三十分やる前に射精管理するぞ」

「えー」

「その方が頑張れるだろ。一週間射精は我慢な。その間にたくさん乳首とかいじって気持ちよくするから」

それは、余計につらくなるやつだろう。

「ルーインドオーガズムもいいよな。覚えてるか？」

「えっと……」

「イク直前に刺激をやめて、情性で精液だけ出させるやつ」

「あ……」

「つらいやつだ。今から一番気持ちよくなれる、という瞬間におあずけをくらい、無様に精液だけを漏らすやつ。」

「目的は、とにかく性欲を高めることだから。どんどんムラムラさせて、しっかり射精管理する」

「うう……」

「イクこと以外何も考えられないってくらいにしておかないと、三十分耐久は耐えられない」

「たしかに、さっきのローターでじゅうぶん地獄を味わった。」

「あと乳首も育て続けるし。そろそろ吸引器もワンサイズ大きいのにしようと思ってる。それを使えば今よりもっとふっくらさせられるから」

「あ、そしたらピアス……」

「ああ。開けるよ。俺のつて印」

「先生の……」

嬉しい。体に穴を開けるなんて絶対に痛いのに、楽しみだと感じてしまう。

「そう。まあ、それはドMクラスも俺が担任になれば、ただ。でもドMクラスを卒業したらちんちんにも開けような」

「……先生がしてくれますか」

「俺がしてもいいけど、そっちはさすがにプロに頼んだ方がいいだろ」

そうなのだろうか。ピアスなんて耳にも開けたことがないのでわからない。

「……お任せします」

「まあプロって言ってもあいつだけだな」

「あいつって？」

「ヤブ」

「養護の先生」

「そう、そいつ」

養護教諭が嫌なわけではもちろんない。けれどやっぱり、ピアスなら須坂に開けてほしかった。

「……須坂先生がいいです。その、養護の先生が嫌とかじゃなくて――」

「ん、わかった」

嬉しそうな声。手で耳をくすぐられる。

「先生」

「ん？」

「おちんちんにピアス開けたらどうなりますか」

「しばらくは勃起禁止になる」

「え——」

「まあ、痛いし怖くて勃起できないとは思うけど。少ししてからオナニーが解禁になる、かな」

「ずっと我慢……」

「でもその後の人生の長さを考えたら一瞬だよ。ホールがしっかり完成したら、チェーンをつけたり鈴をつけたりしような」

「先生になら……なんでも」

「おい、あんまそういうかわいいうこと言うなよ。今すぐ開けたくなるだろ」

それはまずい。これからまだまだ受けなければいけない授業がたくさんある。

「楽しみにとおきます」

「ああ、俺も。さて、そろそろ起きようか。起きられるか？」

「はい」

眠っている間にペニスの感覚も戻っていた。脱ぎっぱなしだった制服を着る。

「できました」

「うん、ちゃんと皮もむいて着れてる。よし、じゃあ次は誘惑の練習な」

「誘惑……」

苦手なやつだ——と思ったけれど、そもそも得意なものなど一つもない。

「誘ってみ」

「えっと……」

えっちしてください、でいいのだろうか。

（えっちって言葉は子どもっぽいかな）

抱いてくださいの方がいいだろうか。

（それとも何か、他の言い方——）

「言っとくけど、言葉じゃなく態度で誘惑しろよ」

「……態度」

「そう。態度」

（……どうしよう）

「もう一つ言っとくと、エロい気分じゃなくてもエロい雰囲気を出せるようにならないとだめだからな」

「う……」

今、まさにそれだった。何度もイって疲れて寝て、その寝起きなのだ。大好きな須坂というのに、少しもいやらしい気分にはなっていない。

けれど須坂の言うとおりでと思った。臨時教師はいつ仕事が入るかわからない。いつでもいやらしい気分になれないといけないのだ。仕事に呼ばれた時に「今いったばかりなので無理です」とは言えない。

「——難しいか」

「すみません……」

色気の出し方がわからない。須坂のようなオンとオフの切り替えができない以前に、そもそもオンがないのだ。

「そのままの素直な感じが里実の魅力ではあるけど……そうだな、里実がこうされたら興奮する、と思うのをやってみろ」

「僕がされたら興奮する……」

「そう。俺にどうされたら里実はいやらしいスイッチが入る？」

何をされても入る、と思った。触れられなくても、熱っぽい目で見られるだけで抱かれなくなってしまう。

最初にそう思ったので、須坂の目を見つめてみる。

「……ん？ どうした？ 赤ん坊か？」

「え？」

「にらめっこでもしたいのか」

「……いえ……」

どうやら冗談ではなく、本当に伝わらなかったらしい。須坂が慌てたような顔をする。

「え？ どうした？ 久しぶりにミルク飲むか？」

「なんでもないです……えっと、他の方法を考えます」

「他の？ 今の、やっぱり意味があったのか」

「……ないです。えっと、じゃあ……」

色気がなくても誘っているとわかってもらえるもの。

須坂の行為で、色気が必要としないもの。

(……なんだろう……)

そういう雰囲気の時、すでに須坂は色っぽい。腰の辺りがぞくぞくするような甘い声で里実の名前を呼びながら、こめかみの辺りを優しく唇でこすったりもする。

「……先生」

須坂にされる時のことを思い出しながら、耳の上の部分を食べる。けれど、顔に当たる髪の毛がくすぐったくてうまくいかない。

「……あの、他のを……」

「うん」

須坂が小刻みに震えている。

「……笑わないでください」

「悪い。我慢したつもりだった」

「がまん」

しゅんと落ち込むけれど、仕方ない。下手だからこそ練習させてもらっているのだ。

(やっぱり色っぽい感じは無理だし……)

須坂にされたことはないけれど、もしされたら興奮しそうなことはないだろうか、と考え方を変えてみる。

(……えっちなこと、とか……)

フェラチオのおねだりをされたら嬉しいかもしれない。
い。

「あの、仰向けになってももらってもいいですか」

「ああ」

須坂がベッドに寝転んだ。肩の辺りをまたぎ、須坂の視線を感じながら制服を脱いで全裸になる。

「里実」

須坂の目に、わずかながら熱を見た。

(これならいけるかも……)

丸見えになったペニス。須坂の顔の前でゆっくりと皮をむき、膝でじりじりと須坂の口元に股間を近づける。

「せんせ……なめ、て……」

ください、とちゃんと言いたかったのに声にならなかった。

萎えたままのペニスを持ち、須坂の閉じられた唇に亀頭をのせる。

「あ……あ……」

さっきあんなにイったのに、その光景だけで興奮してしまった。腰がぞわつとして、陰囊がきゅつと持ち上がる。

「里実……」

「あっ……」

須坂の唇が動くだけで刺激になった。けれど勃起してしまったら口に含んではもらえなくなる。

あくまで誘う練習だとわかっているのに、本当に舐めてほしくなってしまうていた。

「せん——あっ」

須坂が里実の亀頭を唇に挟んだ。

「あ、っは……」

敏感な先端を舌先が上下に舐める。

「ああっ、あっ、アッ」

こういうのをなんと言うんだったか。相手の上につて舐めてもらうやつ。名前が出てこない。快感に意識を奪われ、頭が回らない。

「せんっ、あっ」

須坂は頭を浮かせなかった。だから届く範囲で、先端だけを繰り返して舐める。

「あっアッ、あっ」

もつと、と体が勝手に動いた。須坂の頭に覆いかぶさるようにして四つん這いになり、ペニスの角度を変える。

その瞬間、須坂が里実のペニスを根元まで啜えた。

「アアアッ！」

吸引。そして舌での愛撫。特に亀頭をちゅうちゅうと吸われるとたまらなかった。

「あっ、せんせっ、せんっ、起っちゃう、起っちゃうっ！」

腰がへこへこと勝手に動く。自分の意思では止められない。

「あっ——！」

気持ちいい。

でもこれでは里実のオナニーになってしまう。

「っは……せんせ……」

なんとか理性を総動員して須坂の口からペニスを引き抜く。

「……せんせ」

呼びかけながら上から退くと、須坂も上体を起こした。

「ああ。すごく興奮した」

「ほんと、ですか」

「嘘なんて言わねえよ」

須坂が里実の手を取り、自身の股間に導いた。そこはこちらがどぎまぎしてしまうほど硬く、大きく広がっていた。

「先生……すごい……」

「里実の中に出したい」

「あ……」

耳元でささやかれ、腰の辺りがぞくぞくした。体に勝手に力が入り、目をぎゅっつつぶる。

「ちょろいな」

「……え？」

目を開けると、須坂が笑っていた。

「里実はすぐにいやらしい気分になっちゃうからな」

「あ——！」

須坂はお手本を見せてくれたのだ。

里実はそのなことにも気付かず、「中に出したい」の一言だけでその気になってしまっていた。

「今日の誘いは合格点。俺の上で見せつけながら制服脱ぐのも、ちんちんの皮をむくのもめっちゃエロかった」

「ほんとですか！」

ここまで褒めてもらったのは初めてかもしれない。

「ああ。プライベートだったら今頃突っ込んでる」

「わ！」

嬉しい。

「腰を振るのは下手くそだったけどな」

「う……」

「でも下手なりに気持ちよくなろうとしてるのもエロかったよ。興奮した」

「……へへ」

褒められた気はしなかったけれど、嬉しい。

「こうしてさ——」

須坂が里実を背後から抱いた。

「俺の手を持って、自分で乳首に導くとかしてもいい。『ここ、して』とか言ってさ。そういうときはストレートに『乳首いじって』って言うより効果的だったりする。『ここってどこ？』って言葉責めにも繋がるし」

「頑張って覚えます」

「うん。でも声のトーン次第ってのもあるからさ、やっぱり雰囲気作りが大事かな」

「難しいです……」

決められた答えがないのだ。相手にもよるし、その時の自分のテンションにもよる。

「やっぱり慣れかな。俺に慣れたら、他の人を誘う練習もしような」

「校長先生とかですか」

「校長はだめ」

「どうしてですか」

「すぐその気になるから」

遠慮のない言いようだ。でもたしかに、里実が「してください」と言うだけで、校長なら「はい、しましょう」と言ってくれそうなイメージではあった。

「逆にヤブとかはなかなかのってこないと思う。ああいうタイプはかわすのがうまい」

「そうなんですね」

「藤田もかな。普段はちゃらちゃらしてるけど、誘惑の練習ってわかってたら絶対にのってこない」

「……すごい……」

やっぱり先生なのだ、とつい失礼なことを考えてしまう。

「おかずの奴はだめだな。あいつはちよろすぎる。尻見せたら一発だ」

「ふふ」

「あ、でも入れさせるのは難しいかもしれない」

「どういことですか」

「あいつは舐める方が好きだから。ケツを見せれば舐めさせることはできるけど」

それ以上は、ということだろう。

「そうなんですな」

でもここで、「入れてもらえるように頑張ります」と言うべきかどうかはわからなかった。なので黙っておく。

「あとは……そうだな、理事長なんかもってこないだろうな」

「り、理事長ですか」

さすがに理事長相手に誘惑の練習はできない。

「でも、そののってこないような相手をその気にさせるのが練習なんだけだな」

「……はい」

言われてみれば、須坂もさっきは勃起していたのに今はすっかり萎えている。こうやってオンオフができるのが先生なのだろう。

（授業とか忘れて襲われるくらい思いつきり誘惑できるようにならなきゃ……！）

頑張るぞ、と握ったこぶしを上下に振っていると、背中に触れている須坂の体が小刻みに揺れた。

それからは里実が須坂を誘惑――する練習をした後に、体をいじり倒されるようになった。裏筋にローターを装着されるだけでなく、長さ三センチほどの小さなオナホールで亀頭責めをされたり、イってもイってもしごかれ続けたり――。

そして里実は何度も射精と潮吹き、失禁を繰り返し、ペニスがつらくて、壊れてしまうんじゃないかと怖くなってセーフワードを口にした。

そんな時、須坂が言っていたとおり申し訳なさや自分の我慢の足りなさに落ち込んだ。けれど、須坂はその度にセーフワードを使ったことを褒めてくれた。

「里実、里実」

「ん……」

まぶたが重い。目をこすりながら意識を保つ。

「そろそろ起きろ。今日の授業は終わりだ」

「あ……あれ？ 僕、寝て……」

「ちょっとだけな」

「すみません！」

「午前中にランニングと座学もやったから。疲れてたんだろ。まだ顔が寝ぼけてる。かわいい」

「や……」

見ないでほしかった。けれど顔を隠そうとした手を、

須坂が掴んで離してしまう。

「寝起き、いつも以上に幼く見える」

「うう……」

「かわいい」

顔へのたくさんのキス。恥ずかしいのに嬉しくなってしまう。

「せんせ……」

「里実」

「あ……」

須坂の膝が、里実の股間を押した。いつのまにかあてられていたオムツが陰部に押し付けられる。

「あ、出てるな」

「え」

「おねしょしたんだろ。あんなに潮吹いたのにまだ水分残ってたのか」

須坂が嬉しそうな顔で起き上がった。新しいオムツを用意すると、てきばきと里実のオムツを開く。

「あ……せんせ……」

「ああ、やつぱりちよつとただけだな。でもかわいい」

疲れ切ったペニスをつままれ、皮をむかれる。敏感な先端をおしりふきで包まれると、体がびくと勝手にはねた。

「っ……」

「ちんちん、もつとしてって言ってる」

「言ってなー」

「そうか？　でも里実のちんちん、いじめられるの好きだろ」

「う……」

好きだ。でもそれは須坂がしてくれるから。須坂になら、何をされても結局嬉しくなってしまう。

「でも今日はおしまい。ほら、貞操帯つけるぞ」

「あーはい、お願いします」

二年生の時と同じ、亀頭部分だけに濃い色のついた貞操帯。それに鍵をかけた後、オムツをあてられた。

「先生？」

「かわいいから今日はつけとけ。この正反對な感じがいいよな。赤ん坊みたいにかわいいオムツしてんのに、開いたら貞操帯してるっていう」

「そう……ですか？」

「いけないことしてる気分になる」

「……えっちです」

「好きな子のえっちなところ見て興奮しない男はいないだろ」

好きな子——以前はそういうことを言わなかったのに、文化祭の後、須坂はよく「好き」という言葉を使うようになった。

「僕も——」

「ん？」

「僕も、須坂先生の裸を見るとドキドキします」

「そうか」

嬉しそうな笑み。

「里実も男の子だもんな」

「……でも、おちんちん……は見るの恥ずかしいです」

「見られるのじゃなく？」

「はい……その、全然違いますし」

須坂が笑いながら言う。

「俺のは重そう、なんだもんな」

「う……忘れてください」

須坂のペニスとは、一回りどころか四回りくらい違う。子どもと大人、というより本当に赤ん坊と大人くらいの差があった。

「だからその、腹筋とか、腕とか、筋肉にドキドキします」

「里実だって鍛えれば――」

「なれますか」

須坂がそうっと目をそらした。

だろうな、とは思っていた。骨格から違うし、たくさん食べているのに里実はなぜかガリガリだ。筋肉よりも骨が目立つ。

「筋トレとプロテインでバルクアップしてもいいけど……でもまあ、飯をちゃんと食えばいいよ。無理して体重増やしてもよくないしな。本格的に鍛えたければ、

まずは健康的な体を作ること」

途中わからない言葉があったけれど、ご飯を食べればいいというのはわかったので頷いておく。

「飯と言えさ、最近、うどんを見ると里実のお漏らしを思い出すんだよな。セーフワード使うの、だいたい失禁してる時だから」

「……それも忘れてください」

こんなことなら、違うセーフワードにするんだった。須坂だって食べづらいだろう。

「セーフワードって、変えてもいいんですか」

とはいえ、他には何も浮かばなかった。それでもせめて、ここの寮食堂では出ない食べ物にした方がいいかもしれない。

「別にいいけど。でもあれだろ、他に何にする？ って

訊いても『大学芋』って言うんだろ？」

「……い、言いません」

考えていたわけではないのに読まれたような気持ちになって、そうっと視線をそらす。

「じゃあなんて言うんだ？ 何でもいいぞ」

「……おうどん、のままでもいいですか」

だって何もないのだ。言いやすい言葉で頭が真っ白でも使える言葉なんてなかなかない。

「いいよ。かわいいしな。まあ大学芋でもかわいいけど」

「大学芋は、ちょっと長いです」

須坂はなぜかぷつと嘔き出すように笑った。

「……うんか」

その日の夕食は、うどんだった。

須坂のつぶやきに、おかず兄が反応した。

「なに、須坂先生、文句？」

「違うって。里実のセーフワードが『おうどん』なんだよ」

「え……何ソレめちゃうかわいいんだけど。アナ
ルローズ咲かせながら『おうどんっ！』って言うの？」
「ローズはまだやってねえよ。っていうかやる予定ねえよ」

「え、なんで」 俺里実くんのローズをオナホにした
かったのに」

「お前のために体作ってるわけじゃねえからな」

「でもローズは大事でしょ！」

「ローズやるにはフィスト必須だろ」

「なに、ガバマンはだめってこと？ 里実くんのアナ
ルがガバだろうとキュンだろうとなんでも受け入れな
よ」

「そういう話はしてねえんだよ」

ちんぷんかんぷんだった。

どう頑張っても理解できそうになかったので、須坂
とおかず兄が盛り上がっているうちに踏み台を取り出

す。

くく略くく

須坂が教壇の中央に向かって歩いてくる。

一瞬、須坂と視線が交わった。しかし里実個人に声を掛けることはなく、教卓に両手をついて、ドアの方を向いた。

再度開いたドア。全裸の小柄な男性が入ってきた。

「臨時教師の丸山だ」

「よろしく」

羞恥を押し殺したような表情。それでも丸山は背を伸ばし、生徒たちに恥ずかしいところをすべてさらしていた。

生徒たちがぼつぼつと「よろしくお願いします」と返すのを聞いて驚きから意識を取り戻し、里実もべこりと頭を下げる。

「今日はベツトプレイを見てもらう」

教壇にいるのは須坂と丸山だけだった。MクラスとSクラスの担任教師はなぜか壁際に立って授業の様子を見守っている。この様子だと、須坂が丸山に行為をするということだろう。

（あんまり見たくないけど……）

しかしそのために丸山は来てくれているのだ。それ

に須坂にとってはその仕事で、里実にとっても大切な授業だと思うと、目をそらすことは一瞬たりとも許されないような気がした。

「ペットプレイと言っても、なんの動物になるかは相手の好みによる。だが今日はオーソドックスな犬としてのプレイを行う」

説明した須坂が、教卓を教室の端に片付ける。

そして教壇の中央で、しゃがんだ丸山の首に赤い革の首輪を装着した。

その姿を見ているだけで心が揺れ、落ち着かない気持ちになった。

「この時、息苦しさの確認は必ずするように。首絞めプレイもSMには存在するが、ペットプレイとは別物だ。長時間つけていても不快感がないように、初めてつけた時だけでなく、首輪が首になじむまでの数日間は擦り傷が生じていないかどうかにもこまめに確認する」

説明を終えた須坂が、丸山の正面にしゃがんだ。首輪をつまんで動きを確認する。

「痛くないか」

丸山に向けられたその目は、里実を見る時のものと同じだった。優しく安心してきて何でも言えてしまう――言っているんだと思わせてくれる目。自分が大切にされていると感じさせる目。

丸山が頷く。

「はい」

「首を動かしてごらん」

S Mプレイ中とは思えない穏やかな言い方。

丸山が上下左右に首を動かし、最後にぐるっと回した。

「大丈夫です」

「よし」

須坂が立ち上がり、生徒たちに向き直った。

「もう授業で習っているとは思うが、S Mで一番大切なのは信頼関係だ。それがなければただの暴力行為。Sは必ず、Mが安心できる環境を作ること。ペットプレイだからといって、慣れるまでは言葉を奪ってもしけない。それからセーフワードの確認も忘れないように」

再び須坂が丸山の前にしゃがむ。

「セーフワードは？」

「『ヘルプ』です」

「わかった。ヘルプ、な」

「はい」

「言ってごらん」

「ヘルプ」

「よし」

須坂が丸山の頭を撫でる。

見たくない。けれど見ないといけない。苦しい――。

「風俗店などで、相手と初対面の場合。もしくは再会ま

での期間が空いた場合は必ずプレイの前に相手の体に触れること。頭や体を撫でる、抱きしめる。相手を嫌いだからひどいことをするのではないということを体に教える」

生徒たち――特にスーツ姿のＳタチが一様に頷いた。「さっきも言ったとおり、どの動物になるかは相手による。今日は犬なので、お手やおかわりなどのコマンドを教える」

それから須坂は四つん這いの丸山に対し、根気よくお手を教えた。お手と言いながら手を差し出し、動かない丸山の手を取って須坂の手のひらに重ねさせる。丸山は何もしていなかったけれど、それでも須坂は何度も何度も丸山の頭を撫で、「そうだ、それでいい」「上手だ」と褒めた。

すると次第に、丸山が自ら須坂の手に己の手をのせるようになった。

「――このように、ペット側も教えてもらうという気持ち忘れてはいけない。実際は人間だからコマンドの意味もやり方もわかっているが、自分は何も知らない犬であり人間の言葉はわからない、ということ意識し続けなければならない」

里実を除く、裸に近い服装の男の子たちが頷く。

「プレイに関して、コマンドの他には散歩、給餌――餌やりだな。それから入浴、排泄がある。一般的にペット

プレイで服を着させることはない。本来の犬の散歩は飼い主の隣を歩かせるが、ペットプレイでは四つん這いで歩く姿を見るために飼い主の前を歩かせることが多い。その辺りは通常相手とのやり取りで決めていくが、犬には体を見られる羞恥心がないことを忘れないように」

言葉を切った須坂が、丸山的首輪にリードをつけた。

「さあ、散歩だ。教室を一周するぞ。おいで」

須坂がリードを軽く引くと、丸山が四つん這いで歩き始めた。里実が座っている方に徐々に近づいてくる。

須坂が里実を見るかもしれない。けれど今は、須坂と目を合わせたくなかった。それに、丸山のことも見たくなかった。

授業に身が入っているふうを装いながら、丸山の横の床を凝視する。

須坂の足が視界の端に見えた。けれどすぐに通り過ぎる。

そして、須坂たちが教壇に戻った。

「人間の体は四つん這いで歩くようにはできていない。あまり長時間は歩かせないように。逆にペット側はもし手首が痛くなっても、勝手に手首を回したりしてはいけない。そんな行動、犬はしないからな」

生徒たちが頷くのを待って、須坂は丸山の前にしゃがんでお手をさせ、褒めながらその手首を回してやつ

た。

いつも里実に触れる手。頭を撫でたり、乳首をこねたり、ペニスをしごいたりする手が、他のM男性を癒やしている。

須坂が、Sクラスの生徒の方に向き直った。

「この時、手のひらや膝の怪我也確認するように。ペットプレイをする前に物が落ちていないかの確認はしておくものだが、人間がすることにはミスがある。鋭い物を踏んでいないか、切れている部分がないか、それから青あざになっていないかを確認して、もしあった場合は必ずきちんと処置をすること。これぐらいなら大丈夫だろうという気持ちで信頼関係を壊す」

須坂が、今度は里実やMクラスの生徒たちの方を向いた。

「我慢できないほど痛い場合はアピールして構わない。もし軽い怪我だったとしても、次回からの散歩は嫌がってみせてもいい。相手が溺愛系の飼い主ならそもそも怪我が治るまでは歩かせず、抱っこで移動させてやるだろうが――」

須坂の説明はわかりやすかった。教室全体が納得したような空気になる。

「散歩の後はマッサージをしてやるといい。仰向けで胸や腹を撫でる。ツボを押すようなマッサージじゃなくていい。イチヤイチヤするような触れ合いが目的だ。

それで勃起をするようなら抜いてやる。手でもいいし、セックスでもいい。あくまでペットと人間という立場の違いを明確にするために腰ふり用のオナホールを用意して、射精の許可をやるだけでもいい。場合によっては――」

長い説明を終えた須坂が丸山のペニスを握った。まだ柔らかいそれを優しくしごいて勃起させる。

(うう……)

やっぱり見ていられなかった。須坂が里実以外の人のペニスを握っている。性感を与えている。それだけでも耐えがたいのに、丸山の須坂を見る目がうつとりしているように見えて嫌だった。丸山は、もしかしたら須坂のことが好きなかもしれない。

鉛筆を持ち、さっきの説明をノートに書いて意識を丸山たちから逸らす。

「わう……」

「射精の時間だ」

でも、やっぱり気になって顔を上げてしまった。見たくないのに、見ずにいることができない。

須坂が丸山の勃起から手を離し、一メートルはありそうな大きな犬のぬいぐるみを床に置いた。

「これは特殊なぬいぐるみで、尻の部分にオナホールが装着できるようになっている。オナホールとペニスにローションを塗ってやるのを忘れないように」

須坂が丸山におすわりをさせた。それからペニスにローションを塗りたくる。

「ペットが手を使わずに挿入するのは難しいから、飼い主が手でオナホールまで導いてやる」

里実の心は限界だった。けれどこれは授業。須坂にとってのはただの仕事――しかし苦しくて、けれど泣くわけにはいかず、ノートに説明を書きとめる。

「ここら、俺の手はメスの性器じゃないぞ。ここだ。入れてごらん……ほら、入ってく。気持ちいいな」

聞こえてくる声や音だけでもつらかった。むしろ目をそらしていたことで、須坂の表情や仕草を思い浮かべてしまう。

顔を上げると、丸山はすでにぬいぐるみにのしかかり腰を振っていた。

「この時絶対にペットから離れないように。セックスをする仲の場合は、犬の射精後、オナホールから抜く前に後ろから入れるのも楽しい」

まさか須坂が丸山に挿入するのだろうか。鼓動が速くなる。

丸山がびたりと動きを止めた。

須坂が丸山の尻を覗き込む。

「うん、出てるな」

どうしよう。どうしよう。見たくない――。

「ペットが射精をしたら褒めてやる。それを繰り返す

ことで、最初は羞恥心があったとしても徐々にそれを忘れるようになる」

須坂が丸山の頭を撫でる。

「上手に出せたな。ペニスを見せてごらん——この時、ペットは動く必要はない。人間の言葉はわからないからな。飼い主は残滓を絞ってペニスを清める。当然、オナホルの片付けもだ。でも優先すべきはすべてペット。眠そうなら寝かせてやって、それから片付けをするように」

須坂は丸山とセックスをするつもりはないようだ。しかし、それでも丸山の射精直後のペニスの世話をするのを見るのは苦しかった。もう一度、現実から逃げないように下を向いて鉛筆を動かす。

「ああ、あとペニスに怪我がないかも確認するように。たまに、飼い主の目を盗んで硬いところにこすりつけてオナニーしてしまうペットもいるからな」

須坂の言葉に、Sクラスの生徒たちがくすつと笑う。「そういうところを見かけたらしつけをしてやるといい。とはいえ言葉は通じない。数回注意してもやめないうような貞操帯をつける。そうすると射精したくなる度にねだるようになってかわいいぞ」

須坂が丸山のペニスに貞操帯を装着した。

丸山が「わう……」と鳴いてしゃがみ、須坂の腰に抱きつくようにしてペニスを足にこすりつける。

「なんだ、一回じゃ足りなかったのか」

満更でもなさそうな須坂の顔。

それを見て、ノートをめくる。そこには『ムラムラしたらこすりつける（すさか先生が好き）』と書かれていた。

（先生が好きなやつだ……）

もしかして、丸山はそれを知っていたのだろうか。それで、今ああやってこすりつけているのだろうか。

「まったく、仕方ないな」

須坂が丸山の貞操帯を外した。そして、さつき使ったばかりのオナホール入りの巨大ぬいぐるみを持ち上げる。

「せっかくだから、気持ちよくなってる顔をみんなに見てもらおうな」

須坂がぬいぐるみの向きを変えて床に置いた。丸山は里実たちの方を向いてのしかかる。

「犬に羞恥心はない。そのことをMの生徒は忘れないように。だが、本当は人間だ。恥ずかしいという思いはある。そのことをSの生徒は忘れないように」

須坂が説明している間、丸山は腰を振っていた。けれど気持ちよさそうな顔はしていない。

「わうっ」

「ああ、ほら、ここだ」

須坂が丸山の背後にしゃがみ、ペニスをオナホール

に導いてやった。

途端、丸山の表情がとろける。

「ハッハッハッハッハ」

「射精に時間がかかりそうな時は、適宜ローションを追加してやる」

須坂がローションを手に取り、「ストップ」とコマンドを使った。しかし丸山は腰の動きを止めない。

それでも須坂は怒らなかつた。

「ほら、ペニスが痛くなるぞ」

優しい顔で言っ、丸山の腰を抱いてペニスを抜いた。

「きゃうん！」

「この方がもっと気持ちよくなれるぞ」

須坂が丸山のペニスをしごくようにしてローションを塗り付ける。

「わう……」

恍惚とした丸山の顔。

もう、心がずたずたになってしまっ、そうだった。

「よし」

たぶん、須坂は丸山のペニスをオナホールに導いたのだろう。

けれど里実は、もう顔を上げることはできなかった。

セクシャルスクール4 ―サンプル―

©gooneone (ごーわんわん)

2026/4/26

メール:gooneonegooneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter:@gooneone11

商業情報は『リットリンク gooneone』でご検索ください。

※すべての作品の無断複写・転載・複製を禁じます。

※作品はすべてフィクションです。実在する人物、団体等とは一切関係ありません。

※作品の利用に関して問い合わせた際、十四日を過ぎて返信がない場合でも、許可する旨の応答がない限りは一切の利用を禁じます。